

日琉諸語の疑問・不定表現における韻律的現象の類型化の提案*

佐藤久美子（国立国語研究所）

satok@ninjal.ac.jp

1. はじめに

これまで、個別方言の研究において、疑問・不定表現に多様な韻律的現象が生じることが報告されている。一つは、アクセントの交替である。例えば、東京方言では疑問詞、不定詞共にアクセントの対立を持たないが、疑問詞は頭高型であり、「誰も」・「何も」・「どこも」等の不定詞は平板型である。疑問詞と不定詞の間でアクセントが交替する。

(1) アクセントの交替

- a. 誰が 来る？ （疑問詞：頭高型）
- b. 誰も 来ない。 （不定詞：平板型）

また、東京方言では、不定詞の平板型の平坦音調が文節を超え、節まで拡張することが指摘されている（Ishihara 2003, Kuroda 2005）。

(2) 領域の拡張

- a. 誰が 来ても いい。 （拡張なし）
- b. 誰が 来ても いい。 （拡張あり）

このような拡張現象は、以前より、早田（1985）、久保（1989）によって福岡市方言に起こることが報告されており、その後、類似した現象が長崎市方言などの九州西南部地域の一部の方言に起こることが報告されている（佐藤（2016, 2019b, 2021）、Sato（2016））。とりわけ、福岡市方言は、東京方言や長崎市方言とは異なり、拡張現象が不定表現に限らず、疑問表現にも生じる。

(3) 疑問文における領域の拡張

- a. 誰が 来た？ （拡張あり）
- b. 誰が 来たか 知らん。 （拡張あり）

個別の方言を対象とした上記の研究は、疑問・不定表現に起こるアクセントの交替やその領域の拡張が通方言的に存在する可能性を示唆している。しかし、通方言的な考察は Sato（2018）、佐藤（2019a）が行っているものの、限られた地点、データに基づくもので、十分とは言えない。本発表では、対象とする地点を増やし、より多くのデータに基づいた議論を行う。日本語諸方言と南琉球諸方言を対象とし、多様なデータに基づいた方言間の対照を通して、疑問・不定表現における韻律的現象のパターンを整理し、類型化を試みる。

* 本発表は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」、JSPS 科研費 17K02689（代表：松浦年男）、18K12395（代表：佐藤久美子）、19H00530（代表：窪蘭晴夫）の助成を受けています。調査にご協力くださった話者の皆さま、調査の依頼と調整にご協力くださった山田高明氏と久保蘭愛氏に心より感謝申し上げます。

2. 研究方法

本研究が対象とするのは、日本語の方言としては、田名部・富山・東京・京都・淡路・南国・福岡・壱岐・長崎・天草・八代・南さつま、南琉球の方言としては、与那覇・皆愛・多良間・与那国で話されている方言である¹。いずれの方言も単純名詞にアクセントの対立がある。

データセットとして、不定語の形式・意味が異なる 5 つの文タイプを設定する。全称量化不定文と譲歩文では、不定詞と「モ/デモ」の隣接・非隣接の区別を設けた²。

(4) データセット

	文タイプ	例文
疑問表現	直接疑問文	誰が来た？
	間接疑問文	誰が来たか知らない。
不定表現	存在量化不定文	誰か来た。
	全称量化不定文	誰も来ない。[隣接] / 誰の親も来ない。[非隣接]
	譲歩文	誰でも良い。[隣接] / 誰が来ても良い。[非隣接]

3. 結果

(4)の文タイプに観察される韻律的現象は、以下の基準によって整理できる。

- (5) a. 疑問詞にアクセントの対立があるかどうか。
 b. 疑問詞と不定表現の間にアクセントの交替が起こるかどうか。
 c. 交替の領域が文節を超えて拡張するかどうか。

各現象について、以下で詳述する。

3.1. アクセントの対立の有無

3.1.1. 対立あり

疑問詞にアクセントの対立があるのは、田名部・(富山)・京都/淡路/南国・南さつま・与那覇・皆愛・多良間・与那国である。(6)に田名部と南さつまの例を挙げる。田名部方言は上がり目の有無と位置による対立、南さつま方言は下降と非下降による対立を持つ方言である。例文では弁別的な特徴のみを表記し、上がり目を[、下がり目を]で表す。平板のアクセント型は何も表記しない。

(6) 疑問詞のアクセント (田名部・南さつま)

田名部	[ダー／[ダイ	[ナニ	ドレ	ド[ゴ	[イズ	[ドー
南さつま	ダ]イ	ナイ	ド]イ	ドコ	イッ～イ]ッ	ドゲン

3.1.2. 対立なし

疑問詞にアクセントの対立がないのは、東京・福岡・長崎/天草/八代・壱岐である。東京・長崎/天草/八代・壱岐は下降調、福岡は下降のない平坦音調である。(7)に長崎市方言と福岡市方言の例を挙げる。

¹ 富山、京都、淡路、南国、壱岐、与那国のデータは本ワークショップ発表者の中澤の調査によって、与那覇、皆愛、多良間のデータは本ワークショップ発表者のセリックの調査によって得られたものである。

² 「モ/デモ」の形式が異なる方言、隣接・非隣接の一方のみが許される方言がある。

(7) 疑問詞のアクセント（福岡・長崎）

長崎	ダ]イ	ナ]イ	ド]イ	ド]コ	イ]ツ	ドゲ]ン
福岡	ダレ	ナニ	ドレ	ドコ	イツ	ドゲン

3.2. アクセントの交替の有無

3.2.1. 交替なし

疑問詞と不定表現の間にアクセントの交替が起こらないのは、田名部、富山、与那覇である。これらは全て疑問詞にアクセントの対立がある方言であり、不定表現においても、その対立を保持する。

(8)に田名部方言の例を挙げる。

(8) 田名部方言のアクセント³（交代なし）

疑問詞	[ダー	[ナニ	ドイ	ド[ゴ	[イズ	[ドー
不定表現	[ダイカ	[ナンカ	ドイカ	ド[ゴカ	[イズカ	[ドーカ
	[ダイモ	[ナンモ	ドイモ	ド[ゴモ	[イズモ	[ドンモ
	[ダイデモ	[ナンデモ	ドイデモ	ド[ゴデモ	[イズデモ (イズ[デモ)	[ドンデモ (ドン[デモ)

3.2.2. 交替あり

疑問詞と不定表現の間にアクセントの交替が起こるのは、東京・京都/淡路/南国・福岡・長崎/天草/八代・壱岐・南さつま・皆愛・多良間・与那国である。疑問詞にアクセントの対立のある方言、ない方言の両方が含まれる。アクセントの対立のある方言（下線付き）では、全称量化不定文と譲歩文においてそれが中和し、その方言が持つ平坦な音調型に収斂するという強い傾向がある⁴。存在量化文において中和するかどうかは方言ごとに異なる。(9)に南さつま市方言の例を挙げる。南さつま市方言では、全ての不定表現において、平坦音調（B型）が許容される。

(9) 南さつま市方言のアクセント交替

疑問詞	ダ]イ	ナイ	ド]イ	ドコ	イッ~イ]ツ	ドゲン
不定表現	ダイ]カ ダイカ	ナイカ	ドイ]カ ドイカ	ドコカ	イッ]カ イッカ	ドゲンカ
	ダイ]モ ダイモ	ナイモ	ドイ]モ ドイモ	ドコモ	イッ]モ イッモ	ドゲンモ
	ダイ]ジン ダイジン	ナイジン	ドイ]ジン ドイジン	ドコジン	イッ]ジン イッジン	ドゲンジン

一方、アクセントの対立がない方言では、全称量化不定文と譲歩文では、その方言が持つ平坦な音調型となる⁵。福岡市方言と壱岐方言では、単純名詞に存在しない平坦な音調が生じる。(10)に長崎市方言の例を、(11)に福岡市方言の例を挙げる。

³ 譲歩文では、「いつでも」と「どうでも」に揺れが見られるが、現時点では、この揺れが「誰・何・どれ・どこ」にも見られるかどうかは明らかでない。今後、詳細な調査が必要である。

⁴ 京都/淡路/南国：低起無核、鹿児島：B型、多良間：a型、皆愛：ab型

⁵ 東京：平板型、長崎/天草/八代：B型

(10) 長崎市方言のアクセント交替⁶

疑問詞	ダイ	ナイ	ドイ	ドコ	イツ	ドゲン
不定表現	ダイカ	ナイカ	ドイカ	ドイカ	イツカ	ドゲンカ
	ダイ]モ ダイニモ	ナイ]モ ナイニモ	ドイ]モ ドイニモ	ドコ]モ ドコニモ	イツ]モ イツカラモ	ドゲン]モ ドゲンモ
	ダイデン	ナイデン	ドイデン	ドコデン	イツデン	ドゲンデン

(11) 福岡市方言のアクセント交替

疑問詞	ダレ	ナニ	ドレ	ドコ	イツ	ドゲン
不定表現	ダ]レカ	ナ]ニカ	ド]レカ	ド]コカ	イツカ	ドゲンカ
	ダレモ	ナニモ	ドレモ	ドコモ	イツモ	ドゲンモ
	ダレデモ	ナンデモ	ドレデモ	ドコデモ	イツデモ	ドゲンデモ

以上で見た交替は、不定詞と「モ/デモ」が隣接している環境で起こるものである。このような環境で交替が起こるにも関わらず、二つの要素が隣接していない環境では交替が起こらない方言がある。南さつまと皆愛である。(12)に南さつま市方言の例を挙げる。例文中では該当部分を【】で囲み、そこにだけ音調記号を付す。

(12) 南さつま市方言の例（非隣接）

- a. 【ダイ]ガ】 コタチン ヨカド 「誰が買ってもいいよ」
- b. *【ダイガ】 コタチン ヨカド
- cf. 【ダイジン】 ヨカド 「誰だっていいよ」

3.2.3. 考察

疑問詞と不定表現の間に見られるアクセント交替の実態は、全称量化不定文と譲歩文における平坦音調への変調であると考えられる。体系に平坦音調が存在しない福岡市方言と壱岐方言においても同様の現象が起きていることも、平坦音調への変調が通方言的に見られる強い傾向であることを示している。また、福岡市方言においては、平坦音調が不定詞だけでなく疑問詞にも生じている点が極めて特徴的である。

3.3. アクセント交替が及ぶ領域

3.3.1. 文節以上に拡張あり

本節では、アクセントの交替が及ぶ領域、つまり平坦音調が生じる領域について論じる。3.2 節で示した通り、不定詞に平坦音調が生じるのは、東京・京都/淡路/南国・福岡・長崎/天草/八代・壱岐・南さつま・皆愛・多良間である。このうち、平坦音調の領域が文節以上に拡張するのは、東京・福岡・長崎/天草/八代である。長崎/天草/八代では、不定表現において、平坦音調の領域が文節以上に拡張し、語のアクセントが消失する(佐藤 2016, 2019b, 2021)。例文中で平坦音調が生じる部分を上線で表す。

⁶ 長崎市方言の全称量化不定文では、語の長さが交替のしやすさに影響を与えている。「モ」に先行する要素が3拍以上（「ドゲンモ」「ダイニモ」等）では交替が起こるが、2拍以下（「ダイモ」の場合は交替が起こらないのが自然である。

(13) 長崎市方言における領域の拡張

- a. 【ダイノ リンゴモ】 クワン 「誰のりんごも食べない」
- b. 【ダイガ リンゴバ コオテモ】 ヨカ 「誰がりんごを買っても良い」

一方、福岡市方言では、不定表現だけでなく、疑問表現においても平坦音調の領域の拡張が起こる(早田 1985, 久保 1989, 2001)。

(14) 福岡市方言における領域の拡張

- a. 【ダレガ エーガミル】 「誰が映画見る？」
- b. アンタ 【ダレガ エーガミルカ】 シットート 「きみ、誰が映画見るか知ってるの？」
- c. 【ダレガ キテモ】 オンナジクサ 「誰が来てもおんなじさ」

(久保 2001)

東京方言における平坦音調の拡張に関しては、Ishihara (2003)と Kuroda (2005)の研究で取り上げられている。また、佐藤 (2019a)は、地域と年代の異なる話者への予備的な調査を行い、拡張を許容しない話者グループと許容する話者グループがあることを想定した。ここでもこのような想定の下、前者を東京 I、後者を東京 II として区別する。拡張を許容する東京 II では、長崎/天草/八代と同じく、不定表現でのみ領域が拡張する。

3.3.2. 考察

東京・福岡・長崎/天草/八代に起こる平坦音調の領域の拡張の実態を説明するためには、(i)どのように領域が規定されるのか、(ii)なぜ平坦音調が生じるのかという二つの議論が必要である。現在までに、福岡市方言と長崎市方言を対象としてこれらの議論がなされている。福岡市方言については Kubo (2016)が「複合分析」を提案し、長崎市方言については、佐藤 (2016)が複合分析に基づいた記述を行っている。これらの研究によって両方言の記述は進められているが、複合分析がその他の方言に適用可能であるかどうかは明らかでない。また、この平坦音調の拡張と、多くの方言に観察される不定詞の平坦音調への変調には同一の原理が働いていると推察され、このことを説明するための更なる議論が必要である。

通時的な分析については、本ワークショップ発表者の中澤が「一語化」による分析を行う。

4. 提案

3 節では、(5)に挙げた 3 つの基準によって諸方言に見られる韻律的現象を整理し、(i) 疑問詞と不定表現の間で起こるアクセントの交替には、全称量化不定文・譲歩文における平坦音調への変調という通方言的な強い傾向があること、(ii) 一部の方言では、平坦音調の領域が文節以上に拡張することを述べた。(i)の平坦音調への変調が起こる環境には、不定詞と「モ/テモ」の隣接性が関与しており、(ii)の領域の拡張が起こる環境には、疑問表現と不定表現の別が関与している。そこに見られる含意関係を(15)に示す。

- (15) a. 非隣接環境で平坦音調への変調が起これば、隣接環境でも起こる。
- b. 疑問表現に平坦音調の領域の拡張が起これば、不定表現にも起こる。

(15b)については、佐藤 (2019a)がごく限られた方言の観察に基づいて述べており、また、五十嵐 (2021)

ではより広くイントネーション現象を扱い、韻律句形成を論じた枠組みの中で、その可能性が指摘されている。本発表では、大幅に対象地点を増やしたが、これらの指摘に矛盾しない結果となった。

方言間に見られる韻律的現象の変異を、(15)を踏まえた以下の枠組みで類型化する。

	疑問 表現	不定表現（全称量化不定文・譲歩文）		疑問表現	
		隣接	非隣接		
	対立	平坦音調		平坦音調の拡張	
田名部・富山 与那覇	✓	—	—	—	—
南さつま・皆愛	✓	✓		—	—
京都/淡路/南国 多良間・与那国	✓	✓	✓		—
奄岐・東京 I	—	✓	✓		—
長崎/天草/八代 東京 II	—	✓	✓	✓	—
福岡	—	✓	✓	✓	✓

表 1

5. 課題と展望

本発表で提案した類型化の枠組みは、日本語諸方言だけでなく、琉球語においても有効なものである。今後は、対象地点を増やし、より多くのデータに基づいて枠組みの精緻化を行いたい。また、その過程で、アクセント交替による変調は平坦音調であることが必然なのか、そうであれば、その理由は何なのか、という問いに対する答えを追究したい。

参考文献

- 早田輝洋 (1985) 『博多方言のアクセント・形態論』, 九州大学出版会, 福岡./Ishihara, Shinichiro (2003) *Intonation and interface conditions*. Doctoral Dissertation, Massachusetts Institute of Technology./五十嵐陽介 (2021) 「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 窪園晴夫、野田尚史、プラシヤント パルデシ、松本曜 (編), 22-48, 開拓社, 東京./久保智之 (1989) 「福岡市方言のダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』第 156 集, 1-12./久保智之 (2001) 「福岡方言における統語論と音韻論の境界領域」『音声研究』5 (3), 27-32./Kubo, Tomoyuki (2016) WH prosody and compound accent, *Bungaku Kenkyu* 113, 1-8./Kuroda, Shige-Yuki (2005) “Prosody and the syntax of indeterminates,” *Syntax and Beyond, Vol. 5 of Working Papers in Linguistics*, ed. by Roehrs, Dorian, Kim, Ock-Hwan, & Kitagawa, Yoshihisa, 83-116. Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana./佐藤久美子 (2016) 「長崎市方言における不定語を含む語・文の音調と複合法則」日本言語学会 153 回大会, 12 月 4 日, 福岡大学./Sato, Kumiko (2018) “Intonational patterns of [WH...C[+wh]] structures: Dialectal variation in Japanese,” Paper presented at 5th International Conference on Phonetics and Phonology, NINJAL./佐藤久美子 (2019a) 「不定語のアクセントと不定語を含む文のイントネーション—東京・福岡・鹿児島・長崎の対照—」Prosody & Grammar Festa3, 2 月 17 日, 国立国語研究所./佐藤久美子 (2019b) 「天草市本渡方言における不定語の音調と不定語を含む句・節の音調について」『坂口至教授退職記念日本語論集』149-163, 創想社, 熊本./佐藤久美子 (2021) 「不定語と不定語を含む句・節における音調の実現について—西南部九州二型アクセント方言の対照—」音声学会 35 回大会, 9 月 26 日, オンライン.